

かがみ」「ほっすも」「いばらも」の10種について学名、科名、説明文とが続いている。

昭和3年の暑中休暇といえは私も小学校6年生で、その頃は毎年暑中休暇の1週間位を祖母の実家（当時の手賀村片山一現在の沼南町）に世話になって、毎日天気さえ良ければ手賀沼にでて水草を採集して祖母の弟（当時の漁業組合の組合長等をしていた）に笑われたものである。（論文の著者の住所、湖北村新木一現在我孫子市は祖母の実家から手賀沼をはさんでその北側に当たっていた）。しかし子供であっても祖母の弟のおかげで漁民に大事にされて私が沼辺に出ると必ず誰かが小舟を出して漕いでくれたものである。

その頃の手賀沼の水草の記憶を辿ると多かったものはアサザ、ヒロハノエビモ、ササバモ、トリゲモ、イバラモ、トチカガミ、クロモ、セキシウモ、ガシャモク、ガガブタ、ヤナギモ等で、ヒツジグサ、タヌキモ、ヒルムシロ、ミズオオバコ、フサモ、ヒジ等もあった。

そこでこの田口徹氏の論文に比較して見ると、少年とは申せ私が見逃した種の多いのに驚くと共にあらためて疑問も浮かびあがってきた。

まずムジナモ（モウセンゴケ科）*Aldrovanda vesiculosa* L. であるが、私の知る限り千葉県下での記録は御園勇氏が佐原で、小倉健氏が成東で採集されたという2例だけである。論文では「むじなもハ手賀沼ニ於テハふさもニツイテ多量ニ採集サル。」とある（アンダーラインは私の註）。

このツイテは付着してという意味か、或いは次いでという意味かを考察すると論文の中で、手賀沼産水草中約

7割がふさもで、たぬきもが採集量の3位、かたしゅじくもが第4位とあることからツイテとは次いでの意味で採集量の第2位に当たることになった。ひめたぬきも、くろもについては順位が示されていないことでも判る。

「たぬきも」も多量に採集されるとあっても私は時折マコモの繁る中に僅かに黄色の花の咲いたものを見つけ喜んで位でどうもおかしいと思ったし、それに「すぎなも」が採集リストに加わっていることもあって、どうしても一応論文の筆者にお会いしておききたいとその消息を知りたくて友人、知己を通じて半年余り尋ねまわってみたが、学校卒業後の経歴も判らず生家だけは別人が居住していることだけが判った程度で月日が無駄にすぎってしまった。

最後の頼みとして卒業生名簿を持つ私の長男（千葉大園芸学部卒）から名簿を借りて調査するに、私の亡父の知友大山毅氏（元農業世界主幹）は大正15年の卒業生、亡兄のクラスメートであった大井次郎博士は昭和2年の卒業生ですでに亡く、幸いにも論文の筆者の2年後輩である奥山春季氏をつきとめ、同氏にお伺いしたが古いことで奥山氏も田口徹氏については記憶がない様で全部残念ながら徒労に終わってしまいがっかりした。

本当に手賀沼に多量のムジナモが自生していたとすればガシャモクの本邦の初採集者である地元出身の植物生態学者中野治房博士が知らぬはずもあるまいし、亦牧野富太郎博士も手賀沼には採集においてになっているので両先生始め他の方々の手賀沼のムジナモについての報文を御知りの会員諸氏の御教示を得たいものである。

(1994. 9. 20)

## 第2回（平成7年度）霧多布湿原学術研究助成の募集

北海道厚岸郡浜中町には、広さ3,168haの霧多布湿原が広がっています。この霧多布湿原は国指定の天然記念物であり、また平成5年6月にラムサール条約にも登録された、極めて自然度の高い湿原です。ラムサール条約に記されている「湿地の賢明な利用」を進めるための基礎資料の収集を図るため、浜中町では学術助成をおこなっています。

主に学部学生、大学院生、および若手研究者を対象に研究助成をいたします。対象となる研究課題は、浜中町内をフィールドとした研究課題とし、自然系・人文系は

問いません。1研究課題に対し、30万円以内で助成金が支給されます（初年度は総額60万円）。応募締め切りは平成7年3月31日です。皆様の積極的なご応募をお待ちしております。詳細は下記問い合わせ先までお願いします。

問合せ先 浜中町霧多布湿原センター

☎088-13 北海道厚岸郡浜中町大字琵琶瀬村  
字4番沢103-19

☎0153-65-2779・2774 (FAX)

担当：富沢日出夫